

- ② 大正大藏經十三 三七五頁
- ③ " " 三七七頁
- ④ " " 三六三頁「分布圖浮提品」
- ⑤ 淨全一、六九二～六九三頁
- ⑥ 淨全一、六七三頁
- ⑦ 淨全一、二一九頁
- ⑧ 真宗聖教全書一、二五三～二五四頁

# 「一百四十五箇条問答」における

法然上人の念仏思想について

堀 立 瑛

三祖良忠の弟子、望西楼了慧によつて集録された「黒谷上人和語燈錄」の中にある「一百四十五箇条問答」は、法然上人の問答に関する法語の中、最も長いものである。この問答は法然上人の念仏に関する内容が豊富であり、広範囲にわたっている故、研究する事によつてこれからの教化活動、念仏実践に役立つものと確信するものである。

この問答は、徳川中期に義山によつて注釈がなされているにすぎず、単独研究はほとんどなされていない。この問答の成立について見ると、百三十九条に「建仁元年十二月十四日、けさんにいりて問ひまひらす事」と記されているのを始め、後の条はほとんど但し書が見え、又この部分が醍醐本（一期物語）や九卷伝、十卷伝、四十八卷伝に掲載引用されているところから見て、この問答は始めから「一百四十五箇条問答」として存在していたものでない様と思う。すなわち但し書にある「建仁元年」前後にある人がおりおりにかわした問答が百三十九箇条になつたものを、了慧が集録に際して「一百四十五箇条問答」に作り上げたものでなからうかと疑われる。しかし了慧は語燈録編纂において、世に法然上人の偽作の多くある中で真作と認められるもののみを集録したのであるから、疑問をはさむ事は慎重でなければならない。ここで石井教道博士は、昭和新修法然上人全集六四七頁の脚注に、夢中松風論の「百四十ヶ条問答」を出して成立問題を提起しているが、三田師の「浄土宗史の諸研究」や「夢中松風論」の中の諸問答と、和語燈錄の諸問答を

比べてみると、澄円は「百四十五箇条」を「百四十ヶ条に見誤つたものと推定できる故、脚註に述べられたものは価値が薄い様に思う。

この問答の問題提出者は明らかにされていないから、問者を研究する事によつても問答成立の鍵をとく事ができよう。この問答は全体において女性に關する事柄が多いところから、前述の「建仁元年」を重点において、その当時の法然上人に帰依した女性を研究する事において問者を推定するところである。

次に「一百四十五箇条問答」が早く成立していたとするならば、各種法然上人伝と比較対照する事において、この問答と他伝記との間に何らかの關係がある様に思う。「和語燈錄」以前に成立したと思われる伝記には「十六門記」「伝法絵流通」「醍醐本」には最後がある。この中「醍醐本」には最後の三箇条がそのまゝ引用されている。他は關連したものが見えるのみである。以後に成立した諸伝記には「四十八卷伝」「九卷伝」「十卷伝」数条見える程度で他は關連したもののばかりである。ここで諸伝記との關係について研究して伝える事は、この問答

は關連的にはほとんどの伝記を上げる事が出来るが、それらの内容は選択集を通じてはじめて關係するものであつて、直接的には全然別のものである様に思われる。唯、「醍醐本」を主とする流れの系統には多少影響していた事が認められるのみである。

次にこの問答の背景とその内容を研究すると、百四十五箇条に及ぶ問答は臨終に際していかに極樂往生が出来るかという往生の用心について法然上人にありあり尋ねたものである。ではこの問答がどの様なところに關心をもち、そしてこの問答に対して、法然上人はどの様な態度でのぞまれたかを研究するものである。今この問答はおよそ五項目に分類する事が出来る。1 供養について、2 戒について、3 物語について、4 女性について、5 念仏及び臨終について、である。この分類は問者を中心になされたものであるが、今後なお検討を要するものである。これらの分類を総合的に見て法然上人の一貫した念仏思想を考察するに、外から内からくる何ものをも包括して念仏の中に帰一せしめ、たゞ合掌を本体として心を一つにして申す念仏すなわち念仏が生かされる日々の生活を進め

インターネット公開許諾のない文章には  
墨消し処理を施しています。